

第12回新鋭評論賞

正賞

俳句の円環的な読みに関する試論

伊藤 幹哲

こと	を	より	分析	的に	検討	すれば	、	優れた	俳句
を	選	別	し	よう	と	する	過程	に	お
を	置	く	立場	が	あ	る	と	い	つ
支	え	な	い	だ	ろ	う	。		
また	あ	る	読	者	は	こ	れ	と	異
俳	句	を	探	究	す	る	と	い	う
い	て	無	関	係	に	作	品	を	比
先	の	例	に	戻	れ	ば	鳳	作	句
そ	れ	ぞ	れ	の	良	さ	を	吟	味
る	か	と	い	う	観	点	か	ら	両
し	、	こ	の	よ	う	な	読	者	に
る	表	現	が	用	い	ら	れ	て	い
句	の	み	を	評	価	し	、	劣	つ
捨	象	す	る	こ	と	に	な	り	や
本	論	の	立	場	は	、	こ	れ	ら
本	論	で	は	前	提	と	し	て	、
の	が	か	な	り	の	程	度	で	不
ず	る	。	そ	の	上	で	、	こ	れ
否	定	的	に	捉	え	る	の	で	は
固	有	の	構	造	を	踏	ま	え	て

ある俳句と別の俳句が似通っているというこ	歴史も長い上、作者の人口も多いことから、	る。それは、俳句は十七音の最短詩型であり	論に入るに先立つ前提を論じておく必要があ	具体的な例を用いて説明していきたいが、本	早速、俳句の相互補完的な読み方について	二俳句間の類似性が不可避的であること	試論としたい。以下、順に論じていく。	る質問に対し簡単に回答し、全体をまとめて	能性について指摘したい。最後に、想定され	れのテクストが今まで以上の味わいを得る可	芸術作品をもテクストとして指定し、それぞ	トが俳句に限られないことを説明する。他の	さらにその先に、紡がれていくべきテクス	を中間的にまとめる。	措定可能な俳句が数多くあることとその意義	を試みる。これらを踏まえて、読者において	つまり、俳句同士が相互に補完し合う読み方	等であるものとして読み、俳句間の円環性、	読む方法を模索する。具体的には俳句間を平
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

と	が	ま	ま	発	生	し	や	す	い	と	い	う	事	実	で	あ	る	。	
こ	の	点	に	つ	い	て	、	「	一	」	で	は	①	「	し	ん	し	ん	
と	肺	碧	き	ま	で	海	の	た	び	」	(	篠	原	鳳	作	)	と	「	い
か	づ	ち	の	香	を	吸	へ	ば	肺	し	ん	し	ん	と	」	(	川	端	茅
舎	)	の	例	を	挙	げ	た	。	さ	ら	に	例	を	挙	げ	て	い	け	ば
そ	れ	ぞ	れ	の	テ	ク	ス	ト	間	の	類	似	性	の	程	度	に	差	が
あ	る	も	の	の	、	②	「	静	さ	に	堪	へ	て	水	澄	む	た	に	し
か	な	」	(	与	謝	蕪	村	)	と	「	静	か	さ	に	堪	へ	で	田	螺
の	移	り	け	り	」	(	村	上	鬼	城	)	③	「	づ	か	づ	か	と	来
て	踊	り	子	に	さ	さ	や	ける	」	(	高	野	素	十	)	と	「	づ	
か	づ	か	と	夏	の	踊	り	子	号	に	乗	る	」	(	仁	平	勝	)	④
「	瀧	落	ち	て	群	青	世	界	と	ど	ろ	け	り	」	(	水	原	秋	櫻
子	)	と	「	群	青	世	界	セ	ー	タ	ー	の	頭	を	抜	く	る	ま	で
(	相	子	智	恵	)	⑤	「	麻	葉	う	て	ば	十	三	夜	月	遁	走	す
(	石	田	波	郷	)	と	「	ぼ	ろ	ぼ	ろ	の	月	負	う	て	蟹	遁	走
す	」	(	今	井	聖	)	⑥	「	初	夢	の	扇	ひ	ろ	げ	し	と	こ	ろ
ま	で	「	(	後	藤	夜	半	)	と	「	初	夢	を	さ	し	さ	は	り	な
き	と	こ	ろ	ま	で	「	(	鷹	羽	狩	行	)	な	ど	が	拳	げ	ら	れ
る	。																		
こ	こ	で	は	、	①	新	興	俳	句	と	ホ	ト	ト	ギ	ス	、	②	蕪	

[illegible]

「碧」は海の色から身体が透き通る感覚に変	痛みが無意識にまでしみ渡るとなるところ、	ない措辞のねじれがあり、肺が碧くなるまで	「碧きまで」の色彩に至る間には茅舎句には	で浸透している」と指摘する。さらに鳳作句の	と「の」「しんしんと」の痛みが、無意識にま	において「いかづちの香を吸へば肺しんしん	前提に、「しんしんと肺碧きまで海のたび」	両者のうち先行するのが茅舎句であることを	だ先行研究があるので引く。それによれば、	挙げた①の例に戻る。両者を並べ置いて読ん	議論を進めるために、具体例を出す。先に	益であろう。どういうことか。	そ読み方を変えた方が俳句の読者にとって有	のような不可避性を所与のものとして、いつ	しかしいずれ避けられないことであれば、そ	どという観点から捉えてきたのではないか。	らが先行俳句か、どちらがすぐれた俳句かな	できないものと捉えたとき、これまではどち	このように俳句間の類似性を免れることが
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------

容	し	て	、	深	い	自	己	浄	化	の	願	い	が	あ	る	、	と	い	う
読	み	解	き	が	な	さ	れ	て	い	る	(注三)。								
	こ	の	鑑	賞	は	、	先	行	す	る	テ	ク	ス	ト	を	踏	ま	え	て
後	行	す	る	テ	ク	ス	ト	に	お	い	て	ど	の	よ	う	に	受	容	さ
れ	た	か	を	丁	寧	に	読	み	解	き	な	が	ら	鑑	賞	を	深	め	る
も	の	で	あ	る	。	た	だ	、	従	来	の	こ	の	鑑	賞	で	は	結	局
茅	舎	句	を	踏	ま	え	て	鳳	作	句	が	ど	の	よ	う	に	読	ま	れ
る	べ	き	か	と	い	う	観	点	か	ら	語	ら	れ	て	お	り	、	無	意
識	的	に	鳳	作	句	の	方	が	優	れ	た	句	で	あ	る	と	い	う	前
提	で	鑑	賞	が	進	ん	で	い	る	と	思	う	。						
	だ	が	そ	も	そ	も	、	い	ず	れ	か	の	俳	句	を	重	視	す	る
こ	と	に	よ	つ	て	、	無	意	識	的	に	優	れ	た	俳	句	を	見	落
と	す	お	そ	れ	が	あ	る	の	で	は	な	い	か	。	先	行	す	る	俳
句	も	後	行	す	る	俳	句	も	独	立	し	た	同	価	値	の	テ	ク	ス
ト	で	あ	る	と	し	、	鑑	賞	に	際	し	時	系	列	に	重	き	を	置
か	な	い	読	み	方	を	提	案	す	る	。	テ	ク	ス	ト	同	士	を	し
て	互	い	に	補	い	合	う	読	み	方	で	あ	る	。					
	具	体	的	に	①	を	読	ん	で	み	る	。	先	行	研	究	と	は	逆
に	、	鳳	作	句	の	存	在	を	前	提	と	し	て	、	茅	舎	句	の	ど
の	よ	う	な	鑑	賞	が	可	能	と	な	る	か	。	試	み	る	に	鳳	作

	は、	昼の明るい海を見て爽快感を味わっている。	さらにその先にある海坂を見、無意識的に自らの心身と海の碧さとが響き合っている。その両者が相俟ったときに、海の碧をして肺まで同一の碧に染まっでいると直観し、「しんしんと肺碧きまで」という表現に結実したものだろう。		このように鳳作句において、自らの心身にまで碧さが染みわたっていく象徴的表現として「しんしんと肺」との措辞が用いられている。すると、茅舎句がただ先行句だからという理由で、茅舎句の「肺しんしんと」は身体的な意味での結核等による肺の痛みに過ぎないかと解する理由は無い。 鳳作のよう に拡大したものではないが、仰臥して何もできないながらも雷の香を吸っている。鳳作句と同様に、茅舎はいかづちの香と自らの心身が一体となるほどに、外の世界を冀うつつていると解する事ができる。		このような鑑賞は鳳作句があつてこそ、茅
--	----	----------------------	---	--	--	--	---------------------

舎	句	に	お	い	て	理	解	が	進	み	や	す	い	。	鳳	作	句	も	ま
た	茅	舎	句	を	踏	ま	え	て	こ	そ	味	わ	い	深	い	。	互	い	に
作	者	が	居	る	情	景	は	違	え	ど	も	、	本	質	的	な	点	で	テ
ク	ス	ト	同	士	が	円	を	描	く	よ	う	に	補	強	し	合	う	。	
	さ	ら	に	見	る	。	②	で	は	「	静	さ	に	堪	へ	て	水	澄	む
た	に	し	か	な	」	（	与	謝	蕪	村	）	と	「	静	か	さ	に	堪	へ
で	田	螺	の	移	り	け	り	」	（	村	上	鬼	城	）	を	挙	げ	た	。
①	以	上	に	類	似	性	が	高	く	、	「	静	か	さ	に	堪	へ	」	ま
で	が	同	一	で	あ	る	上	に	季	語	の	「	田	螺	」	も	同	一	で
あ	る	。																	
蕪	村	句	は	、	田	螺	が	田	や	池	の	水	底	に	動	か	ず	に	
い	て	、	濁	ら	な	い	か	ら	水	が	澄	ん	で	い	る	。	他	方	、
鬼	城	句	の	「	で	」	は	逆	接	だ	。	静	け	さ	に	堪	え	る	こ
と	が	で	き	ず	、	田	螺	は	ゆ	っ	く	り	と	移	り	ゆ	く	。	そ
れ	ぞ	れ	に	作	者	と	対	象	と	の	心	理	的	な	距	離	が	近	い
蕪	村	句	に	お	け	る	田	螺	は	留	ま	る	田	螺	、	鬼	城	句	に
お	け	る	田	螺	は	ゆ	っ	く	り	動	く	田	螺	。	物	と	作	者	が
渾	然	一	体	と	し	て	田	螺	と	自	己	と	が	同	一	、	少	な	く
と	も	投	影	と	読	む	解	釈	か	ら	す	れ	ば	、	両	句	は	そ	れ
ぞ	れ	の	作	者	の	人	生	を	象	徴	し	て	い	る	と	読	め	る	。

山	本	健	吉	の	言	葉	を	借	り	れ	ば	「	秩	序	を	乱	す	あ	る
指	摘	す	る	(	注	四	)	「	う	さん	く	さい	感	じ	「	は	、		
乗	せ	た	こ	と	の	面	白	さ	で	あ	る	こ	と	が	わ	か	る	「	と
か	づ	か	と	「	と	い	う	五	文	字	を	五	七	五	の	リ	ズ	ム	に
十	の	句	を	読	む	と	き	、	素	十	の	句	の	面	白	さ	が	「	づ
う	さん	く	さい	感	じ	。	仁	平	さん	の	句	を	通	し	て	素			
は	「	づ	か	づ	か	と	「	と	い	う	言	葉	の	、	ど	こ	と	な	く
	こ	の	点	に	つ	い	て	、	岸	本	尚	毅	は	「	共	通	す	る	の
ス	ト	と	し	て	上	五	と	「	踊	り	子	「	が	同	一	で	あ	る	。
号	に	乗	る	「	(	仁	平	勝	)	を	挙	げ	た	。	両	者	は	テ	ク
る	「	(	高	野	素	十	)	と	「	づ	か	づ	か	と	夏	の	踊	り	子
	③	で	は	「	づ	か	づ	か	と	来	て	踊	り	子	に	さ	さ	や	け
ま	れ	や	す	い	鑑	賞	で	あ	る	と	思	う	。						
ト	間	の	優	劣	を	付	け	ず	に	両	者	を	並	べ	た	と	き	に	生
年	期	と	も	読	む	こ	と	も	で	き	る	。	こ	れ	ら	は	テ	ク	ス
さ	ら	に	は	、	あ	る	人	の	人	生	に	お	け	る	青	年	期	と	老
る	場	所	に	安	住	し	な	い	生	き	方	も	あ	る	こ	と	だ	ろ	う
示	す	る	よ	う	に	疾	風	怒	濤	こ	そ	が	人	生	と	考	え	、	あ
人	生	も	ま	た	一	つ	の	生	き	方	で	あ	る	。	鬼	城	句	の	暗
蕪	村	句	の	示	唆	す	る	よ	う	に	動	き	を	求	め	ず	留	ま	る

し	て	、	天	地	を	轟	か	す	大	滝	の	迫	力	と	滝	周	辺	の	鬱
句	が	在	る	こ	と	に	よ	り	、	セ	ー	タ	ー	を	着	な	が	ら	に
「	群	青	世	界	」	で	あ	る	と	詠	ん	だ	。	読	者	は	秋	櫻	子
っ	ぽ	り	と	出	る	ま	で	の	間	の	短	い	瞬	間	を	捉	え	、	
	相	子	は	青	い	セ	ー	タ	ー	を	頭	か	ら	被	り	、	頭	が	す
世	界	」	の	語	が	共	通	す	る	。									
抜	く	る	ま	で	「	（	相	子	智	恵	）	を	挙	げ	た	。	「	群	青
（	水	原	秋	櫻	子	）	と	「	群	青	世	界	セ	ー	タ	ー	の	頭	を
	④	で	は	「	瀧	落	ち	て	群	青	世	界	と	ど	ろ	け	り	」	
補	い	な	が	ら	、	互	い	に	新	た	な	読	み	を	提	供	す	る	。
れ	た	感	覚	が	あ	っ	て	飄	逸	な	俳	味	が	あ	る	。	両	者	は
乗	り	込	む	作	者	の	姿	で	あ	り	、	良	い	意	味	で	裏	切	ら
情	景	に	導	か	れ	る	。	そ	れ	は	伊	豆	に	向	か	う	特	急	に
わ	け	で	あ	る	が	、	想	定	し	た	素	十	句	と	は	全	く	違	う
素	十	句	を	想	起	し	、	来	た	る	べ	き	中	七	下	五	を	待	つ
の	読	者	は	上	五	「	づ	か	づ	か	と	」	を	読	ん	だ	瞬	間	に
る	。	他	方	で	、	素	十	句	が	存	在	す	る	こ	と	で	仁	平	句
こ	と	で	素	十	句	の	面	白	さ	を	捉	え	直	す	こ	と	が	で	き
	岸	本	の	評	の	通	り	、	読	者	は	仁	平	句	が	存	在	す	る
空	気	の	動	揺	」	で	あ	る	（	注	五	）	。						

「遁走す」が共通する。	す「（今井聖）を挙げた。「月」と座五の	（石田波郷）と「ぼろぼろの月負うて蟹遁走	⑤では、「麻薬うてば十三夜月遁走す」	いたかは議論の埒外にある。	を読む立場から、秋櫻子が相子句を想定して	なお、俳句のテクストの円環性を前提に句	句を豊かにする。	部分における共通が、補い合いながら相互の	ぞれの世界に満ちている。一つの言葉の本質	方次第で群青の光りは風景にも日常にもそれ	ハレとケの二面は背反するものではない。見	ながっていることを読み取ることが可能だ。	同時に心のどこかでセーターを着る日常とつ	ことで、大瀧を見、蟲音を聞きながらにして	他方で、秋櫻子句もまた相子句が存在する	して、「群青世界」の語が生きている。	う心の躍動を日常の中に感じたことの表現と	た木立の群青の光りを追体験する。香気の漂	蒼とした杉を初めとする背の高く年月を重ね
-------------	---------------------	----------------------	--------------------	---------------	----------------------	---------------------	----------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------

波郷は、自身の清瀬での結核療養の体験を	前提として、モルヒネ等の麻薬による治療を	受けた。その結果、本来美しい十三夜の後の	月が逃げ出すように動いていると感じた。波	郷の当時の病状を踏まえて自らの境涯に取材	した句である。一方で皆が愛でているであろ	う十三夜の月の美しさに、心の平安を保とう	とするが、他方でその月さえも遁走してしま	うという心持ちに、揺れ動く病臥の心理が表	現されている。	今井は、蟹を見ている。沢蟹などが相応し	いだろうか。必死に何かから逃げようとする	蟹に、月の光が当たってあたかも背負っている	かのように見える。	確かに表面的には波郷句と異なり、今井句	において遁走する主体は蟹である。しかし、	この句は情景描写であると同時に象徴的表現	である。一句において暗喩するところのもの	は、大いなるものがぼろぼろに破れ去ったに	もかかわらず、その破れ去ったものを信じて
---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------	---------------------	----------------------	-----------------------	-----------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

背負い、その良さをいつか世に問うべく再起	をを図るべく、今は必死に逃げる男の自画像で	あろう。	波郷句が存在すること、句が二重写しになつて、波郷ら先人を「月」と見立てている	という読みが成立する余地がある。そう読む	場合の「ぼろぼろの月」は作者個人の破れ去	つた理想というよりは、傷つけられて痛めつ	けられた先人たちの功績を指し、それをいつ	か再評価しようとしている、という読みが可	能だ。波郷句の存在が今井句に厚みや深みを	もたらしている。	翻つて今井句が存在すること、波郷句も	また重層性を得ている。この場合、波郷句で	作者において遁走したと思つた月が、さらに	その先に遁走する蟹をも照らしているとも読	める。そうすると先の波郷句のみの鑑賞と	異なり、今井句の存在を知っていることで波	郷句に救いの余地を覬念することができる。	遁走した月はそれでも、蟹のみならず遍く万
----------------------	-----------------------	------	--	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------

1

2

15

十

9

1.2

①

仕

2

子

C

18

	C
--	---

3

五、

--	--

在	
---	--

②



例	え	ば、	か	つ	て	能	を	し	て	い	た	が、	何	ら	か	の
理	由	で	諦	め	て	社	会	に	働	く	者	が	い	る。	そ	の
久	し	ぶ	り	に	見	た	扇	を	拡	げ	た	初	夢	を	見	た。
て	夢	見	心	地	に	初	夢	を	思	い	出	し	つ	つ、	能	に
を	捧	げ、	芸	術	に	仕	え	る	全	く	別	の	生	き	方	が
に	は	あ	つ	た	か	も	し	れ	な	い	と、	物	思	い	に	耽
い	る	と	い	つ	た	具	合	だ。								
	狩	行	句	と	の	テ	ク	ス	ト	の	類	似	が	狩	行	句
さ	せ、	夜	半	句	に	お	け	る	読	者	の	鑑	賞	の	幅	が
っ	て	い	る。													
	翻	っ	て	狩	行	句	は、	作	者	が	家	族	に	語	ら	な
た	内	容	を	読	者	の	想	像	に	委	ね	て	い	る。	テ	ク
の	近	さ	か	ら	夜	半	句	を	連	想	す	る	こ	と	は	お
な	い。	読	者	は	一	つ	の	可	能	性	と	し	て、	狩	行	句
お	い	て	狩	行	が	家	族	に	語	ら	な	か	つ	た	夢	が、
女	「	の	よ	う	な	扇	に	物	狂	う	能	で	あ	り、	そ	れ
る	の	を	新	年	か	ら	避	け	た	等	と	想	像	で	き	る。
句	の	存	在	が	狩	行	句	に	具	体	性	を	与	え	る	の
四		読	者	が	措	定	で	き	る	テ	ク	ス	ト	は	限	定
い	こ	と	と	そ	の	意	義									

月	風	く	句	ん	つ	論		ん	連	す	だ	重	た	れ		し	る	で	
の	の	雲	と	し	に	じ	また	で	想	る	と	層	な	の		し	も	は	従
夜	身	雀	し	ん	限	て	本	い	を	理	す	性	読	俳		か	の	、	俳
空	に	「	て	と	ら	き	論	る	許	由	れ	を	み	句		し	と	こ	句
へ	近	（	は	」	な	た	で	（	容	は	ば	生	与	は		な	し	れ	間
柿	し	小	、	に	い	が	は	注	し	な	、	、	え	相		が	、	ま	の
若	「	林	「	つ	。改	、	あ	六	な	い	そ	豊	れ	互		ら	他	で	俳
葉	（	一	し	い	め	円	え	）	が	。そ	の	か	、	に		以	方	ど	句
「	荻	茶	ん	テ	①	環	二		俳	も	よ	な	補	上		上	の	ち	の
（	原	、	と	ク	の	性	つ		句	も	う	背	完	の		の	俳	ら	テ
中	井	「	百	ス	例	を	の		と	も	な	景	し	例		句	か	ク	
村	泉	月	合	ト	に	有	俳		し	も	可	を	合	証		は	の	ス	
汀	水	し	の	を	戻	す	句		の	季	能	有	う	に		切	俳	ト	
女	、	ん	咲	同	と	る	を		重	語	無	し	こ	抛		り	句	が	
、	「	し	き	じ	、	テ	措		層	自	碍	う	と	れ		捨	の	類	
「	し	ん	け	く	「	ク	定		性	体	に	。そ	の	ば		て	み	似	
し	ん	と	り	す	、	ス	し		を	が	否	う	と	、		ら	が	す	
し	と	空	啼	る		ト	て		生	一	定		新	そ		れ	優	る	
ん		吹		俳		は				定				れ		て	位	ケ	
		く				二				の				ぞ			す	ー	
																		ス	

「しんしんと肺碧きまで海のたび」と「いか	は紙幅の都合上鑑賞を試みないが、筆者が	ば、それぞれに平等の価値を有する。本論で	これらは俳句を円環的に読む立場からすれ	同様の類似性がある俳句も多数あるだろう。	無論筆者の知らぬ俳句との間でテクスト間に	「香」「吸う」等を用いる俳句がありえる。	を用いる俳句、茅舎句について「いかづち」	いる俳句、「海」「旅」ないし「海のたび」	が言える。更に鳳作句について「碧き」を用	加えて「肺」を用いる俳句にも同様のこと	暇が無い。	(飯田龍太)など、思いつくだけでも枚挙に	(大野林火)、「繭白ししんしんと山遠くまで	(加藤楸邨)、「颱風の雲しんしんと月つつむ	茅舎)、「鷹翔てば畦しんしんとしたがり	櫻子)、「しんしんと夜の光の草茂る」「川端	る雪のしんしんと松を降りかくす」「水原秋	本の本郷若葉しんしんと」「山口青邨)、「降	と寒さがたのしみゆく」「(星野立子)、「古
----------------------	---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-------	----------------------	-----------------------	-----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	-----------------------

ト	を	俳	句	に	限	る	必	要	が	な	い	。	そ	う	考	え	た	方	が
の	延	長	に	お	け	る	帰	結	と	し	て	、	そ	も	そ	も	テ	ク	ス
が	で	き	る	俳	句	に	限	定	は	な	い	こ	と	を	論	じ	た	。	そ
	「	四	」	の	結	論	と	し	て	、	読	者	が	措	定	す	る	こ	と
き	る	こ	と																
五		他	の	芸	術	作	品	を	も	テ	ク	ス	ト	と	し	て	措	定	で
が	生	ま	れ	よ	う	。													
が	よ	り	鋭	く	向	き	、	新	た	な	読	み	が	増	え	、	好	循	環
そ	の	結	果	、	そ	の	短	詩	型	の	豊	か	さ	へ	読	者	の	意	識
う	短	詩	型	そ	の	も	の	が	豊	潤	な	世	界	を	内	包	す	る	。
立	ち	の	ぼ	る	も	の	が	増	え	る	。	さ	ら	に	は	俳	句	と	い
み	が	深	ま	る	。	そ	の	結	果	、	そ	れ	ぞ	れ	の	俳	句	か	ら
る	こ	と	を	前	提	に	し	た	方	が	、	俳	句	そ	の	も	の	の	読
	こ	の	よ	う	に	、	俳	句	同	士	が	無	限	に	紡	が	れ	続	け
句	が	も	た	ら	す	効	果	を	検	討	す	る	こ	と	さ	え	可	能	だ
句	を	歳	時	記	の	よ	う	に	全	て	横	に	並	べ	て	、	相	互	の
こ	と	が	で	き	る	。	さ	ら	に	そ	の	先	に	、	こ	れ	ら	の	俳
の	俳	句	が	円	を	描	く	よ	う	に	作	品	の	鑑	賞	を	深	め	る
う	に	、	読	者	は	任	意	の	俳	句	同	士	を	並	べ	て	、	相	互
づ	ち	の	香	を	吸	へ	ば	肺	し	ん	し	ん	と	「	で	試	み	た	よ

「しんしんと」は上下をつなぐ詞となっていてい	き声が天に聞こえるまで「しんしんと」で、	と「であり、同時に遠くの田における蛙の鳴	の歌では「死に近き母に添寝」が「しんしん	を吸へば肺しんと」を採り上げる。茂吉	このうち最初の歌と茅舎句「いかづちの香	のテクストが指定できる。	にゆかめとわれ山に来ぬ」(北原白秋)など	吉「さらに「しんしんと寂しき心起りたり山	しんと怵へかねたるわが道くらし」(斎藤茂	左千夫を喪つての「ひた走るわが道暗ししん	づ天に聞ゆる」(斎藤茂吉)や師である伊藤	「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかわ	の例として、短歌では「死にたまふ母」の	また①に戻って検討する。「しんしんと」	ストを指定することはできない。	かわらず、読者に対し思い浮かべるべきテク	の手を離れている。そのため作者の希望にか	る。もとより作者が俳句を詠んだ瞬間に作者	テクスト間の読みにさらなる重層性が生まれ
------------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	---------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	---------------------	-----------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

る。	茂吉歌を踏まえ茅舎句を読むと、誰かを	思う	気持ち	が句の背後に流れ出す。茅舎が身	動き	困難な中、母や大切な人を思いながら息	を吸い込む様が「肺しんと」の表現に結	実したという鑑賞が可能に思う。	茅舎句を踏まえて茂吉歌を読むと、茅舎句	が存在することにより、添寝する茂吉のみな	らず、病臥している母の感覚が読者に流れ込	んで共有される。茂吉歌の「母」は末期で動	けず寝静まっていると解される。だが身動き	ができない中でも最後まで呼吸はする。読者	は息を吸うことに伴う嗅覚と平時感じえない	肺の痛覚とが、しんとしんと一体となってい	鋭敏で繊細な感覚に共感する。	さらに双方の歌と句を踏まえ「しんと	の表現の静かに、だが、ゆっくり確実に心	積もりゆく様がより奥深く感じられる。	さらに指定すべきテクストは、俳句・短	歌・小説等の文字テクストに限らない。⑤の	例では、「遁走」に關し「無数蟻ゆく一つく
----	--------------------	----	-----	-----------------	----	--------------------	--------------------	-----------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------	-------------------	---------------------	--------------------	--------------------	----------------------	----------------------

が	こ	六	ち	る	ガ		な	い	は	い	れ	上	ガ	で	ガ	句	げ	遁	ら
あ	の	生	が	。オ	を	他	る	気	な	く	繰	げ	（ト	は	（と	テ	ぢ	走	み
り	よ	じ	さ	オル	聴	方	重	持	十	。そ	り	る	短	ヨ	ハ	ク	の	の	は
う	う	う	ら	ルガ	き	で、	層	ち	三	その	返	。小	調・	ハン	・	ス	脚	翅	遁
る	な	る	に	ンの	な	、波	性	と	夜	た	さ	フ	B	セ	バ	揃	使	走	せ
。紙	本	疑	増	の音	が	郷	が	共	に	ゆ	れ	W	ス	ス	ひ	ふ	「	「	（
幅の	論に	問に	す者	と響	に	句	生	鳴	し	た	て	V	チ	チ	け	」	（	秋	加
許す	対し	対す	もい	き合	て、	存	じ	す	わ	う	い	5	ヤ	ン	り	」	元	藤	楸
限り	ては	るい	るだ	って、	どこ	在	う	。こ	しく、	よう	る	7	ン	・	」	不	死	邨	（
、回	はい	くつ	ろう	、敬	かに	すこ	。	うし	、波	な	う	8	バ	ッ	と	男	」	「	蠅
答を	いく	かの	（注	虔な	月光	こと		て波	郷	進	ち	）と	ハ	の	波	」	遁	生	れ
試み	つか	の回	七）	気持	を感じ	で、		郷句	の	行	に	波	小	フ	郷	曲	走	の	早
る	の意	答	）。	持		小		にさ	ど	は	展	採	ー	ー	句	（フ	の	げ	や
	見					フ		ら	かし	で	開	り			を	フ	ぢ		

まず（一）俳句を円環的に読むことそれ自体	への批判がありうる。確立されていない読み	方であるし、技巧的な読み方だとの指摘だ。	だが今までなされていない読み方だとして	も、それを理由に排除すべきではない。無益	だと分かれば時代の経過によつて淘汰される	だろう。	なるほど文芸批評において、ある文学作品	をテキストと見なす立場について、批評家が	小説（ノベル）などの長いテキストを要約す	る際に、恣意が生じかねないことや要素の配	置等の影響を捨象しかねないことが指摘され	てきた。	しかし俳句は十七音であり、一読で作品全	体が目に入る。要約の必要がなく円環的な読	み方・鑑賞・批評と相性が良いものと思う。	以上の通り、小説等の文芸批評を思えば、決	して技巧的な読みではない。	次に（二）本論の立場は剽窃を推奨・助長	するという意見があるかもしれない。だが誤
----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------	---------------------	----------------------

解	で	あ	る	。本論は読み方のみを論じている。
本	論	は、ある俳句と別の俳句とが類似しや		
す	い	と	いう避けられない事態を前にしての具	
体	的	な読み方の提起を主眼としてゐる。従つ		
て	詠	み方についてでは論じておらず、過去の俳		
句	を	参照して俳句を詠んでもよいという立場		
で	は	ない。		
最	後	に、(三)俳句の円環的な読みについ		
て	は、読者を却つて限定するのではないかと			
い	う意見があるかもしれない。仮にある俳句			
が	紡いでいるテクストについて知っているこ			
と	で魅力がわかるということだと、俳人同士			
で	完結し内向きになりうるという意見だ。			
し	かし①の例であれば、鳳作句・茅舎句を			
独	立したテクストとして読むことに問題はな			
い	。既に鳳作句については、鳳作句だけを採			
り	上げた優れた鑑賞が多数ある。多面的な読			
み	方が増えてすべて受け入れられながら読み			
が	連なつて、一つのテクストは豊饒なる世界			
を	背景に有し、その面白さが深まるだろう。			

また俳句の読者と俳句の作者とは同一である	と言われ続けてきた。だが本論の読みのアップ	ローチは、俳句も他の芸術作品をも最終的に	は一つのテーブルの上にテクストとして紡が	れ続けることを想定する。その中で、俳句が	他の芸術の愛好家にも理解され、俳句読者が	広まる可能性がある。外向きの議論だ。	七	結語	以上の通り、本論では俳句間の類似性が不	可避的であることを踏まえ、俳句間を平等で	あるものとして円環的に読むことを試みた。	テクスト同士は相互に補完し合う。さらに措	定できるテクストは数多い。俳句・短歌・音	楽・美術等の芸術作品をもテクストとして措	定できる。	そうすること、テクストそれぞれの世界	が更新されていく。俳句を円環的に読むこと	で、あるテクストは別のテクストにまた紡が	れながら、さらに大きな円を描いて連なっ	ゆく。
----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	---	----	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------	--------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----

円を描くとはまた戻ってくるといこうとで

あ
る
。
俳
句
と
い
う
短
詩
型
そ
の
も
の
が
、
互
い
に

呼
応
し
な
が
ら
充
実
し
て
い
く
と
捉
え
る
べ
き
だ
。

今まで切り捨てられてきた俳句があるかもし

れ	な	い	。	だ	が	少	し	捉	え	方	を	変	え	さ	え	す	れ	ば	、
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

古	来	の	テ	ク	ス	ト	と	も	未	来	の	ま	だ	見	ぬ	俳	人	の	テ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ク
ス
ト
と
も
、
ま
た
他
の
芸
術
作
品
と
も
、
テ
ク
ス

トを介して連なる豊饒なる世界がそこ現に

[illegible][illegible]

(注一)	安里琉太の例証により、「君胡麻摺
------	------------------

れ
我
揺
鉢
を
押
さ
へ
み
む
ー
（
小
澤
實
）
と
「
君
火

を	焚	け	よ	き	も	の	見	せ	む	雪	ま	る	げ	ー	（	松	尾	芭	
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--

蕉、
「くわみる煮てくるるといふに煮てくれず

（小澤實）と「約束の寒の土筆を煮て下さい

（	川	端	茅	舎	）、	一	初	比	叡	一	点	の	わ	れ	立	ち	に	け	り
---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

（小澤實）と「うごかざる一点がわれ青嵐」

（石田郷子）、「虚子もなし風生もなし涼しさ

よ
ー
（
小
澤
實
）
と
「
風
生
と
死
の
話
し
て
涼
し
さ

よ	「	（	高	濱	虚	子	、	「	鏡	餅	昔	電	話	は	玄	関	に	「
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ら	ぬ	「	八	田	木	枯	、	「	蓮	根	掘	り	モ	ー	ゼ	の	杖	を	
（	中	原	道	夫	）	と	「	誰	の	忌	ぞ	雪	の	匂	ひ	が	し	て	な
（	川	崎	展	宏	、	「	私	の	忌	の	代	案	に	雪	降	ら	せ	た	き
夫	）	と	「	冬	と	云	ふ	口	笛	を	吹	く	や	う	に	フ	ユ	「	
「	く	ち	び	る	は	言	の	葉	の	崖	冬	を	い	ふ	「	（	中	原	道
に	目	醒	め	て	寒	し	女	の	書	架	「	（	秋	元	不	死	男	、	
覚	め	て	闇	深	し	「	（	片	山	由	美	子	）	と	「	或	る	部	屋
思	ひ	そ	魂	祭	「	（	松	尾	芭	蕉	、	「	雛	飾	る	部	屋	に	目
を	橋	の	上	「	（	權	未	知	子	）	と	「	数	な	ら	ぬ	身	と	な
な	「	（	河	東	碧	梧	桐	、	「	の	ど	け	し	や	数	な	ら	ぬ	身
未	知	子	）	と	「	蒲	団	二	つ	敷	け	ば	大	佐	渡	小	佐	渡	か
穀	、	「	佐	渡	ヶ	島	ほ	ど	に	布	団	を	離	し	け	り	「	（	權
と	「	龜	猫	そ	の	手	を	と	つ	て	話	し	か	け	「	（	岸	本	尚
「	冬	ぬ	く	し	土	龍	の	穴	に	語	り	か	け	「	（	田	中	裕	明
繪	の	売	れ	の	こ	り	ゐ	る	走	馬	燈	「	（	後	藤	夜	半	、	
ず	に	あ	れ	ば	草	紅	葉	「	（	田	中	裕	明	）	と	「	お	な	じ
虚	子	の	墓	「	（	宇	佐	美	魚	目	、	「	好	き	な	絵	の	売	れ
し	「	（	田	中	裕	明	）	と	「	こ	れ	よ	り	の	夜	長	の	山	と
（	鷹	羽	狩	行	、	「	こ	れ	よ	り	の	夜	長	の	橋	を	思	ふ	べ
（	小	川	輕	舟	）	と	「	葉	桜	や	む	か	し	小	使	室	に	鍵	「

（注三）『俳句の一欠片』（林桂、二〇二三	二〇一八年、小林良作、「鴻」発行所出版局）	れている（『八月や六日九日十五日』のその後	いう句には多数の詠み人がいることが検証さ	（注二）例えば「八月や六日九日十五日」と	年十二月）。	の身体―岩田奎「膚」に触れて―、二〇二三	代の幅広い句が類似性を持つことが示される	は屍の出てゆく門」（石田波郷）と幅広い年	てゆく草の絮」（池田澄子）と「綿虫やそこ	如し」（永田耕衣）、「見ていてあげる門を出	う」（池田澄子）と「少年や六十年後の春の	（原子公平）、「虹二重六十年前のデートのよ	子」と「良く酔えば花の夕べは死すとも可」	「花月夜このまま運が尽きても可」（池田澄	来よ天金の書をひらくたび」（三橋敏雄）、	の書をひらくとき」（鷹羽狩行）と「かもめ	ときを掴み出す」（西東三鬼）、「春雷や天金	掴み出す」（鷹羽狩行）と「蓮池にて骨のご
----------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------

[illegible]